

視覚障害者向け変体仮名学習テキストの作成について

咲 本 英 恵

はじめに

平成24年度入学生より、新たに「日本文学講読A・B」が日本語日本文学コースの必修科目となった。なかでも講読Aは『首書源氏物語 夕顔巻』（和泉書院）をテキストとし、変体仮名を読めるようになること、変体仮名を通して『源氏物語』夕顔巻の世界を読み解くことを授業の到達目標としている。

さまざまな古典作品が活字で読めるいま、変体仮名による作品受容のありようはほとんど伝わらなくなった。だが変体仮名は単に文章を伝えるだけの文字ではなく、書き手や彫り師、あるいは版元といった作品受容者である古人が、どのような態度で作品を受容しようとしたかを伝えるひとつのメディアである。たとえば国宝源氏物語絵巻の柏木巻は、文字じたいが涙を流しているかに見える書体と、行を追うごとに書き出しの位置が下がっていく書式によって、光源氏の妻女三宮と密通し死に至る柏木の悲痛なる物語を表現する。その文字は読者を不安にさせ、死を覚悟しつつも女三宮への執着を断ち切れないでいる柏木の不安な状況を重層的に感受させるだろう。また、さまざまな本に見られる朱入れの跡は、宿命的に乱れてしまう作品本文をいかにうまく読み解くかという、受容者の苦心をわれわれに見せつける。その苦心の末に生まれた本文を読むことは、〈本文〉というものが決して単一ではないということを知るきっかけにもなる。変体仮名学習とは、画一的に整理された活字本では知ることができない、古人の読書体験を体験し発見する場なのであり、古典に親しむすべての人に、その機会があつてよいはずだ。しかしそうはなっていない。

この研究の目的は、変体仮名を指導する立場にいる人間が、嗜眼者はもちろんのこと視覚障害をもった学生にも平等に教えることができ、しかも視覚障害を持った学生じしんが変体仮名を学びやすい教材を作ることである。現在、伊藤鉄也氏を中心として、源氏写本の触読研究が、平成27年度科学研究費助成事業としておこなわれており（注1）、視覚障害者の学びの多様化が国家レベルで重視され、

視覚障害者向け変体仮名学習テキストの作成について

要求されつつあることが実感される。本学には視聴覚障害を持つ学生が在籍していることもあり、本研究はそうした現実を反映し、本学部所属の視覚障害者Aさん（日本語日本文学コース）の協力を得ながら進められた。

1. テキスト作り

「日本文学講読A」のテキスト『首書源氏物語』は、寛文十三年刊、本文と註釈を一冊にまとめた『源氏物語』の版本である。一ページを上下半分に分け、『源氏物語』本文を下段に置き、注釈を、本文の該当箇所にあたる場所の upper 段に書いている。それまで本文とは別に存在していることが普通であった注釈が一緒になったこの本は、当時の『源氏物語』読者にとって画期的であったに違いない。昭和二十年代まで『源氏物語』の底本として広く読まれていた『湖月抄』も、このテキストスタイルを用いている。学生はこの授業で、変体仮名という日本独自の文字文化を学びながら、江戸時代における『源氏物語』受容の様相の一端を知る。

点字化できない変体仮名を視覚障害者が学ぶためには、立体印刷によるテキスト作りが有効である。立体印刷とは、専用の印刷紙（カプセルペーパー）に文字を印刷し、立体印刷機にくぐらせ、熱することによってできる。立体印刷機には赤外線ヒーターが組み込まれており、それが発熱して黒い印刷部を浮かび上がらせるのだ。印刷口に用紙を一枚ずつ差し込まなければならない手間はありますが、作業したいはごく単純である。

とはいえ、いくつかのクリアしなければならない問題があった。

テキスト作りの第一の問題は、文字の大きさであった。授業では、和泉書院が出版しているA5版の『首書源氏物語』を用いたが、この作品は、前述のように上下を半分に分け、上半分に古注釈本文、下半分に『源氏物語』本文が載る。本文部分には12行×18文字、およそ216文字の変体仮名が詰め込まれていて、頭注はさらに文字が細かい。そのまま立体印刷しても、文字が小さすぎて指が文字を判読できないから、拡大コピーをする必要がある。どれだけ拡大すればよいのかも見当がなかったから、ともかくまずは本文の半分の分量にあたる6行を、A3版に収まるくらいに拡大した。また、テキストの膨大化を避けて、授業で最低限必要な本文部分のみを立体化することにした。

作業は試行錯誤である。本文の半分の分量にあたる6行をきりと、倍率を変えて何パターンか拡大コピーする。採用したのは、6行を倍率400%、A4サイズに拡大コピーし、そのA4サイズの本文を、さらにA3サイズに拡大したものである。また、本文の翻刻は105ポイントで作り、同じく6行を倍率250%でB4サイズにし、それをさらに倍率150%に拡大、さらにA3版に拡大した。

次の問題は、文字の触読のしやすさにあった。小さい文字を拡大すれば、文字の輪郭はがたがたになり、直線はぼやけてしまう。それが「あ」や「ま」「め」など、交差する箇所が多い文字の触読を特に困難にさせた。また、コピー台が汚れていたために紙に無駄な点や線や影がカプセルペーパーに印刷され、立体印刷機によって浮かび上がったそれらが触読の邪魔をした。そこでカプセルペーパーに印刷する以前の拡大版テキストの文字を、輪郭を太ペンでなぞりあるいは修正液でけずることでもめらかな直線や曲線を持つ字に変え、文字のほかに余計な黒点や線がついていれば、それも修正液で消した。コピー機の印刷台の汚れもふき取った。単純なことを、われわれはいちいち見落としがちだ。

本文の印刷、翻刻の印刷が終わると、同じ要領で、①「変体かな一覧表」と②「首書源氏物語夕顔巻漢字順草」も立体印刷した。①は『変体仮名の手引』（中野幸一編、武蔵野書院、二〇一四年）所収のもので、この授業の副教材『字典かな』（笠間書院）に相当するものとして用意したもの、②は授業の副教材として使用している『字典かな』では補えない、漢字のくずし字の用例（見本）を、頻度の多いものを中心に、テキストに出現する順に並べたものである（注2）。これらをテキストの文字と大きさが揃うよう、試行錯誤しながら拡大していった。結果、テキストも副教材も、持ち歩くには大きくずっしり重たいものとなった。

2. 授業風景

授業では、学生は『字典かな』や『漢字順草』から、字母（変体仮名の元になった漢字）に該当するような文字を見つけ出し、変体仮名を読んでいく。学生が自分なりに変体仮名を読み解いたあと、教員が正しい読み方を示す。その繰り返しである。AさんにはじめてTAがついた。

たとえば『源氏物語』夕顔巻の冒頭は「六条わたりの御忍び歩きの頃」で始まるが、「六」や「条」といった漢字の場合、Aさんに視覚障害者向け変体仮名字習テキストの作成について

はまずそれらが漢字であることを伝え、「順草」に載っている用例のいくつかを触読してもらう。ひらがなの場合は、それがひらがなの何の文字であるかを伝え、「かな一覽」にある該当文字を触読し、さらにその変体仮名の字源となった漢字・字母にも触れてもらう。授業を受けるにあたって、Aさんはとくに漢字に気を使っていたようだった。というのも、全盲のため盲学校では漢字を学ぶ機会が少なかったAさんにとっては、テキストに出てくる漢字だけでなく、変体仮名の字母になった漢字も、知らないものであることがあったからだ。ゆえに漢字を扱う場合は、漢字の形を想像してもらうために手を取って書き順通りに指を動かしたり、漢字の意味や用例の説明をしたりし、とくに知らない漢字（字母）についてはその文字じたいの形を覚えるために、活字をA4サイズに拡大し、立体印刷物にして渡すこともあった。ひらがなの場合も同様の手続きを踏むが、その字母を伝えるときに、求められればやはり、漢字の立体印刷物を作ったり、その意味や用い方を説明したりした。

未知の文字として変体仮名を新たに修得することは誰にとっても多少の困難を伴うが、とくにふだん点字を使うAさんにとって、点字化できない漢字を触読するためには、常にサポートが必要であった。しかも副教材を含め三種類のテキストがあり、それらのさまざまなページを行ったり来たりしながら文字を探していかなければならない作業は、負担が大きかったと思う。またそもそも、何枚もある「かな一覽」や「漢字順草」のなかから本文の変体仮名に相当する文字を自力で見つけることじたいが困難であった。その問題は本人が、副教材の一ページごとに、載っている文字の点字シールを貼ってインデックスをつけることで解決していくしかなかった。

おわりに

意欲的な取り組みの結果、Aさんは昨年度、日本文学講読Aの単位を取得した。現在はこの経験を活かし、山本聡美先生のもと、本学図書館所蔵『竹取物語絵巻』を触読している。今回の視覚障害者のための変体仮名教材作りは、ひとまず成果を——もちろん本人の能力や意欲が大いに関係したのではあるが——修めたことになる。

業者に依頼しない独自の教材作りを通して、われわれは、立体印刷物を作る基本的な作業方法だけでなく、個々人の指や触覚に合わせたメリハリのある立体線と点を作らなければならないこと、線や点を密集させてはならないこと、空白部分の汚れや影に気をつける

必要があることを知った。この経験は、Aさんが受講する日本文学演習等で平安時代の服飾や家屋等を学ぶためにも役立っている。たとえば、女房装束を知ってもらうために画像を提示する場合、Aさんにはその画の立体印刷物を渡すことになるが、その際、もとの画に書いてある装束のしわを消し、何枚にも及ぶ桂の重なりを生地部分の模様の密集度の違いで表現したりしている。触読しやすさを考慮した結果である。また、これはAさんが教えてくれたことだが、変体仮名を学んで嬉しかったのは、見えている人と同じ文字を読めるということだったそうだ。Aさんが日頃読んでいる点字は、盲学校を卒業してしまえば他に読める人を見つけることは難しく、また常に点字を読むAさんは、他の人と同じ文字を読むことはできない。その点、変体仮名を読む時だけは、みんなと同じ文字の世界にすることができる。それが嬉しくて、Aさんは変体仮名を読み続けたのだという。立体印刷機さえあれば、変体仮名とは、現代においてそれ自体で実は〈平等な〉教材なのかもしれない。変体仮名学習の意味を、思わぬところから気づかされた思いがする。

ただし残された課題もある。先に掲げたように、この研究は、晴眼者だけでなく視覚障害者にも平等に変体仮名を教えることができる教材を作ること、そして視覚障害を持った学生が変体仮名を学びやすい教材を作ること、の二点であった。だがAさんがTAを必要としたことから、授業での学習も自主学習も独りで行うには困難だったことは明らかである。「平等」な教材にするためには、テキストの軽量化を目指すこと、さらに電子機器を駆使することも必要であったろう。また今回のテキストは、文字のかたちをイメージするために重要な書き順を学ぶ点については行き届かず、TAなど、人の力に丸投げされた。この点は予算も含めた解決策を模索する必要がある。

この研究は、視覚障害者のための学習支援の方法を探るほんの第一歩であつたろう。しかし、必修科目であつた日本文学講読Aだけではなく、次年度、「竹取物語絵巻」を通年で学習する授業を彼女が選択したことを思うと、本研究がAさんの学問の道を、少しかもしれないが広げた可能性はあるのではないか。

本学でのこの研究成果が、視覚障害者のための学習支援の一助となれば幸いである。

注1 成果が「古写本『源氏物語』の触読研究」HPに公開されている。http://genjiitosakurane.jp/touchread/?page_id=279

視覚障害者向け変体仮名学習テキストの作成について

注2 漢字のくずし字は「五體字類」(西東書房)等の字典を自ら引かせることも考えたが、まずはスムーズに読む喜びを感じてもらうことを目的として、視聴覚障害者だけでなく、晴眼者にも「漢字順草」を配布している。日本文学講読Aのために、本学助手在籍中に自作した補助教材である。

晴眼者用「漢字順草」



視覚障害者用「漢字順草」



参考文献

渡辺哲也、大内進「触読しやすい立体コピー点字のパターンに関する研究―原図の点径及び点間隔の条件について―」
国立特殊教育総合研究所紀要、第30巻、二〇〇三年

社会福祉法人視覚障害者支援センター
『月刊 視覚障害―その研究と情報―』
No. 318、二〇一四年十一月